

性暴力を考える

読者から

上

「性暴力を考える——被害者からの連載に対し、九日までに百六十四通の投書をいただきました。うち約四十通が被害者からの手紙でした。まず被害者の声を紹介します。」

「小学生のとき痴漢にあつて以来、私は自分のことを人間じゃないみたいに感じます。道具みたいだと思ってしまう。傷ついたことは痴漢のほかに二つあります。警察で詳しく言わなければならなかったこと。母に『あんたがぼんやりしてるから』と言われたこと。悪気なく出た言葉だろうけど、一生忘れません。私は人間として生きているつもりでも男の道具として道を歩いている。死んでしまいたい気分です」(高校生)

「九歳のとき男に性暴力を受けました。父が警察に通報しましたが、警官は犯人と同年代の男ばかり。『胸をもまれてどんな気持ちでした』な

被害者の手紙40通

は嫌だと抵抗をやめると、男は逃げました。私はあのとき着たコート、髪飾り、もう身につけることができません」(27歳会社員)

どと聞かれ、恥ずかしさでいっぱいでした」(18歳)

男性からの訴えも一通あった。「子どものころ男の知人に強姦(ごうかん)されかかった。信じられない悪夢でした。」

「十八歳の時、帰宅途中に後ろから男が飛びかかってきた。『声を出さな』と刃に連れられていかれた。『やめて下さい』と、か細い声で言うのがやっと。足がすくんで逃げられずズボンを下ろされた。何が起

「五年ほど前に、被害の経験があります。相手をどうこうすることは考えませんでした。日本では抵抗したと立証しなければ強姦と認められないと知っていましたし、下品な司法関係者によるセカンドレイプはまっぴらだったからです。犯人たちは軽べつするだけです。それよりも、犯人を野放しにする無知で理解のない周囲に腹が立つのです。」

その最中は、怒らせたら殺されるかも、と思うのです。本当に声も出ないほど怖いのです。頭が真っ白になります。そんな時に抵抗しろだなんて大まじめに定める法律は、完全な空論です。レイプは、見た目よりもっと深刻な犯罪です」(年齢不明)

「望まない相手に性的対象にされることは、例えば『ささいな』痴漢でも、ものすごく不快です。小学生のとき初めて痴漢にあいました。まっ黒な怒りと悔しさは今も忘れられません。私はその場面をよ

足すくんで逃げられなかった抵抗しろだなんて法律は空論だ何百時間も話し合って傷克服

た。だれにも言えませんでした」(年齢不明)

きているのかわからなかった。早く時が過ぎてほしい、早く終わってほしい、そう思うことしかできなかった。わかりますか」(21歳学生)

「終電で帰る途中、痴漢にあいました。肩を押さえられスカートに手を入れられ、『助けて』と叫んだら首をしめられました。相手の顔をしっかりと見ました。しかし、力の差は歴然です。殺されるの

「二十年前、家出した生徒を捜しに行った先で三人の男に暴行されました。あまりの理不尽さ、屈辱、悲しさ、警

た。大柄な男で、ばか力で私を押さえた。『やめて』という声もかすれ声になった。泣いている私を見て男は、『そんなに嫌だったら逃げたら良かったのにと』言った。驚いた。しばらくの間、その男の車と同じ車を見ると、恐怖で息が止まりそうだった。こんなにも傷つくこととは知らなかった」(20代)

「幼いころから性暴力の恐怖にさらされてきました。相手は親類。親には話せませんでした。小学生の私は『十年間考えてみよう』と思いましたが。性とは何か、私に落ち度はないのか、どうしたらこの心の傷を克服できるだろう。か。十年後、初めて話したのは、友人でした。けれど興味本位の質問に、私は絶望しました。それから一年後に父に、その後、母に。何百時間も話し合っただけではありません。自分を責め、死ぬことばかり考えていた私は、この時やっと一つのハードルを越えました。『罪を憎んで人を憎まず』。そう思えるようになったのは、その後、初めて男の人に心を開いてからです。人が人間になれるには教育しかないと思うようになりました。間違った社会は自分たちで変えなくちゃ。一緒にがんばりましょう」(21歳学生)